

思春期自閉スペクトラム症者への看護介入プログラムの有用性：ストレングスの自覚とセルフエスティームの向上

著者	菅谷 智一
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2017
報告番号	12102甲第8728号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00152692

氏名	菅谷 智一		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第 8728 号		
学位授与年月	平成 30年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	思春期自閉スペクトラム症者への看護介入プログラムの有用性 — ストレングスの自覚とセルフエスティームの向上 —		
主査	筑波大学教授	博士（医学）	日高 紀久江
副査	筑波大学教授	博士（医学）	坂田 由美子
副査	筑波大学准教授	医学博士	山海 知子
副査	東京情報大学教授	博士（工学）	川口 孝泰

論文の内容の要旨

菅谷智一氏の博士学位論文は、思春期の自閉症スペクトラム症者を対象にストレングスの自覚とセルフエスティームの向上を目的にした看護介入プログラムを実施しその有用性を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は、思春期は前頭前野の機能が発達する時期であり、前頭前野の働きである自己を客観視するメタ認知も発達するが、自閉症スペクトラム症者は定型発達者に比較してその発達には遅れが生じると述べている。そのため思春期に入ると、自閉症スペクトラム症者は他者から評価されることにより自己の短所についての問題を過大に認識する傾向にある。しかし、自閉症スペクトラム症者が自己の脳の特徴を理解することで自己を肯定的に捉えるストレングスの自覚が可能になり、ストレングスの自覚は自閉症スペクトラム症者のセルフエスティームを高めることに繋がるのではないかという仮説に基づき、本研究では自閉症スペクトラム症者のメタ認知を高めることで自己のストレングスの自覚を促すことが可能な看護介入方法の作成とその有用性を検討することを目的としている。

（対象と方法）

本研究の対象は児童・思春期精神科 1 専門病棟に入院している、DSM-5 の診断基準において自閉症スペクトラム症または自閉症スペクトラム症の疑いと診断され、IQ70 以上の 12～18 歳の中学生、高校生である。

著者は従来からの精神障害者を負の側面から捉えることに異論を唱え、個人の特徴や経験、才能などをポジティブな側面から捉えるストレングスという視点を持つことが必要であり、ストレングスモデルを看護介入プログラムの理論的基盤にしている。ストレングスは人間が持ち合わせている能力であり、関係づくり、共感、誠実性、無条件の肯定的配慮、映し返しなどのストレングスを促すための技法と、

自己の脳の特徴を理解することでメタ認知の活性化を図るために共感化・システム化理論に基づいた技法を看護介入プログラムに取り入れた説明している。

看護介入プログラムは計5回であり、各セッションにテーマと目標を設定し、メタ認知活動支援とストレングスマodelの技法を使用している。看護介入プログラムの開始前に、自閉症スペクトラム指数(AQ)、ユースセルフレポート(YSR)、保護者が子どもの行動を評価する子どもの行動チェックリスト(CBCL)の調査を行い自閉症スペクトラム症者の状態を把握し、看護介入の前後では対象者のメタ認知尺度、ストレングスの自覚を測定する自己肯定意識尺度、セルフエスティームとしてRSES-Jの測定を行い、看護介入前後の各尺度得点は統計解析を用いて比較検討している。

さらに著者は、看護介入の初回と最終回に自閉症スペクトラム症者の自己意識に関して、また看護介入終了後には看護介入の有用性について対象者にインタビューを実施し質的分析を行っている。

(結果)

対象者は、保護者および本人の同意が得られた13名を対象に看護介入プログラムを実施したが、セッション期間内に精神症状が不安定になった1名の看護介入を中断したため12名を分析対象者としている。男女は各6名、平均年齢は15歳、自閉症スペクトラム指数(AQ)は27.9点であり、高機能自閉症の疑いの強い33点までは至っていないが、精神状態と行動を評価する自己評価のユースセルフレポート(YSR)や保護者が対象の評価を行った子どもの行動チェックリスト(CBCL)では、ひきこもりや不安抑うつ等の得点が高い集団であると著者は説明している。看護介入は1週間に1-2回、1回45~60分であり、自閉症スペクトラム症者に対して計5回のセッションが実施されている。

著者は看護介入プログラムの前後において、メタ認知尺度、自己肯定感尺度の「自己受容」、「充実感」、セルフエスティームとしてRSES-Jが有意に上昇したと述べている。

自己意識に関しては、看護介入前は【ソーシャルスキルが低い】【今の自分を否定したい】【他者と異なる自分】の3カテゴリが抽出されたが、介入後は【こだわりも個性のうち】【無垢な心を持っている】【秀でたところがある】など6カテゴリにカテゴリ数も増加し、内容的にも自己をポジティブに捉えているようなカテゴリが含まれていた。また、看護プログラムの評価では、【自分と向き合うことができた】【自分のことを考えることができた】などの6項目が抽出され、自閉症スペクトラム症者は自己と向き合う時間となっていることが示唆されるとともに、【自分の好みに合わせて欲しい】など看護介入プログラムのテーラーメイド化が期待されていたと著者は述べている。

(考察)

著者は、思春期の自閉症スペクトラム症者の看護介入プログラムの前後で比較すると、メタ認知、自己肯定感尺度、RSES-J得点が有意に上昇しており、また自閉症スペクトラム症者の自己意識についても、看護介入プログラム終了後には自己を肯定する内容に変化していることから、自閉症スペクトラム症者のメタ認知を高め、ストレングスの自覚を促し、セルフエスティームの向上につながる看護介入プログラムである可能性が示唆されたと述べている。とりわけ自閉症スペクトラム症者の自己認識に関してはネガティブなカテゴリから看護介入後にはポジティブな発言も聞かれたことは、セッションの積み重ねにより自己の脳の特徴などの知識を深めることにより、自己を客観視する能力が高められ、そのことによりストレングスの促進につながったのではないかと論じている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究で著者は、思春期の自閉症スペクトラム症者を対象にストレングスの自覚とセルフエスティームの向上を目的とした看護介入プログラムを実施しその有用性について検討している。治療法の確立されていない自閉症スペクトラム症者が看護介入によりメタ認知、ストレングス、そしてセルフエスティームを高めることの可能性が示唆された点において、児童・思春期領域の精神科医療における重要な知見を示している。

平成30年1月25日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(看護科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。